

基礎看護技術演習の体験に関する遡及的調査

大西香代子¹, 大串 靖子²

Abstract

The aim of this study was to examine the ethical aspects of nursing education using a retrospective survey of nurses' experiences with in-class practice for basic nursing skills as a nursing student. We analyzed nurses' perspectives on in-class practice for nursing skills and delineated the methods and contents of such education. Using self-administered questionnaires, we conducted a survey of 190 nurses nation-wide who attended the Certified Expert Nurse (CEN) training course. The instrument focused on 7 basic nursing skills that necessitate special ethical considerations. The results of the survey showed that among the 5 skills that involve invasive procedures, intravenous blood collection ranked highest with 80% of respondents having "practiced on fellow students." As for injection, approximately half of respondents had "practiced on fellow students." About 10% of nurses had never drawn blood nor given an injection, neither to a fellow student nor to a dummy, during their in-class training. Regarding skills that could infringe on personal privacy, approximately 86% of respondents had performed a full-body bed bath on a fellow student, and about the same percentage had performed in-bed toileting as those who had not. When asked about how they now reflect on their in-class practice, both those who had practiced and who had not practiced drawing blood and giving injections answered that, "it is appropriate to have some pragmatic experience" with nursing skills. Regarding the pros and cons of practicing nursing skills, over 40% of nurses responded that it was "positive;" no respondents answered "negative." However, regarding the need to acquire personal experience as a patient, respondents' answers were divided between "positive" and "negative." These findings highlight that training for nursing skills is an indispensable objective of nursing education. However, educators need to consider the ethical risks of invasive procedures and potential human right violations, and thus should teach by rote and through using a dummy in order to increase the effectiveness of education while still protecting students' human rights. Moreover, to further improve students' understanding of how patients feel, it would be best to cultivate students' ability to empathize, and not to rely on "in-class patient experience."

Key Words: basic nursing skills, nursing practice, retrospective study

I. はじめに

看護教育機関として4年制大学が急激に増加していることは、看護に科学的知識と科学的思考が求められていることの表れと考えることができる。しかし、一方で、大学も専門学校と同じく、看護職者養成という職業教育の一面をもっており、卒業後は看護師国家試験受験資格が取得できる。そして、国家試験に実技試験がない現状では、基礎教育の段階で基礎的看護技術

を修得する必要がある。このことは、2002年3月に出された厚生労働省の報告書¹⁾でも、看護技術の修得を重視する方針として示されている。臨地実習で実際の患者に看護を展開する前段階として、学内における基礎看護技術演習（以下、技術演習とする）による一定レベルの技術修得が欠かせないが、実際にどこまで実施するかを含めて、その方法に関しては統一されておらず、教員に一任されてきたのが実情である。

また、技術演習の目的も、確実に安全な技術を実施

1 三重大学医学部看護学科

2 青森県立保健大学健康科学部

できるようにするというだけでなく、患者への適切な態度や患者への共感を養うことも重要とされ、学生同士で患者役をすることに積極的な意味が見出されてきた。そのため、かつては患者役としての体験、とりわけ苦しい体験をさせることがよい、とする立場もあったとされる²⁾。一方で、青年期にある学生に患者体験をさせるメリットとデメリットを分析し、床上排泄などで実際に陰部・臀部を露出させられ、時には実際に排泄することまで求められるのは、ある種の危機的状況に陥るに等しく、学生の身体権の侵害ともなるとの意見³⁾もあり、議論がなされてきた。近年は看護教育においても倫理が重要視されるようになり、学内演習の方法も変化してきたと思われるが、演習方法の違いによって学習効果がどのように異なるのかについては、実証的な検討がされておらず、未だに結論が出ていない。また、前述の報告書¹⁾でも、臨地実習で患者に対して実施する場合の検討は詳しくなされているが、技術演習に関しては、「学生がお互いに患者役と看護師役となって行う学内実習は臨場感をもたらす」「患者の立場に立った看護技術の実施につながる」として奨励されており、学生への説明と同意の必要性を述べるにとどまっている。

技術演習のあり方については、学生の認識や学びの分析、あるいは教員による指導方法として検討が行われてきたが、臨床の場に出た看護師を対象とした検討は行われてこなかった。技術演習で学んだことあるいは学ばなかったことが臨床の場でどのような意味をもつのかについては、経験者の意見を聞いてみる必要があるだろう。そこで、臨床現場で働く看護師が経験した学生時代の技術演習の方法及びそれに対する認識を明らかにするために調査を行った。

II. 研究目的

学内における基礎看護技術演習のうち、特別に倫理的配慮を要する看護技術の教育方法について、看護師が学生時代に体験した演習を遡及的に調査し、併せて、その妥当性に対する看護師としての認識を明らかにする。

III. 研究方法

1. 研究対象

特定地域及び特定の領域に偏らず、しかもデータ収集のしやすい便宜的集団であることから、日本看護協会看護研修学校認定看護師教育課程を受講している看護師 190 名を対象とした。

2. データ収集方法

自記式無記名の質問紙による調査研究で、質問紙は認定看護師教育課程の受講期間内に一斉に配布し、記入後即日回収とした。

3. 調査項目

1) 体験した学内演習の方法

基礎看護技術の中でも特別に倫理的配慮を要する項目、即ち身体侵襲の加わるものとして、①静脈内採血、②皮内注射、③皮下注射、④筋肉内注射、⑤経鼻胃管の挿入、また、プライバシー侵害となるものとして、⑥全身清拭、⑦床上排泄の 7 項目を選び出し、対象者に体験した演習方法を尋ねた。回答は、選択肢法とし、演習の方法は、①講義（を受講）、②示範（デモンストラーション）の見学、③物品の準備、④他学生による実施の見学、⑤模型（モデル人形など）を用いた実施、⑥学生同士での実施、⑦その他の 7 種類の方法とし、その中から経験した方法をすべて選択することとした。

2) 学内演習についての認識

看護技術 7 項目の演習方法の妥当性についての感想は、「とても良い」（肯定的）から「とても疑問」（否定的）まで 4 段階の尺度を示し回答を求めた。

さらに、看護師となった立場からの学内演習についての意見を、自由記述で回答してもらった。

3) 基本属性

基本属性としては、対象者の卒業した教育機関の種類と卒業年を記入するよう求めた。

4. 分析方法

演習方法と感想のデータをクロス集計し、 χ^2 検定により有意差を調べた。有意水準は 1% とした。自由記述の部分は、KJ 法を応用し分析した。

5. 調査時期

2004 年 7 月

6. 倫理的配慮

回答は任意であり、すべて無記名とした。また、結果の公表にあたってプライバシーの保護に十分配慮すること、得られたデータは研究以外に用いないことを口頭及び文書で対象者に説明し、同意が得られれば回答に応ずるよう依頼した。

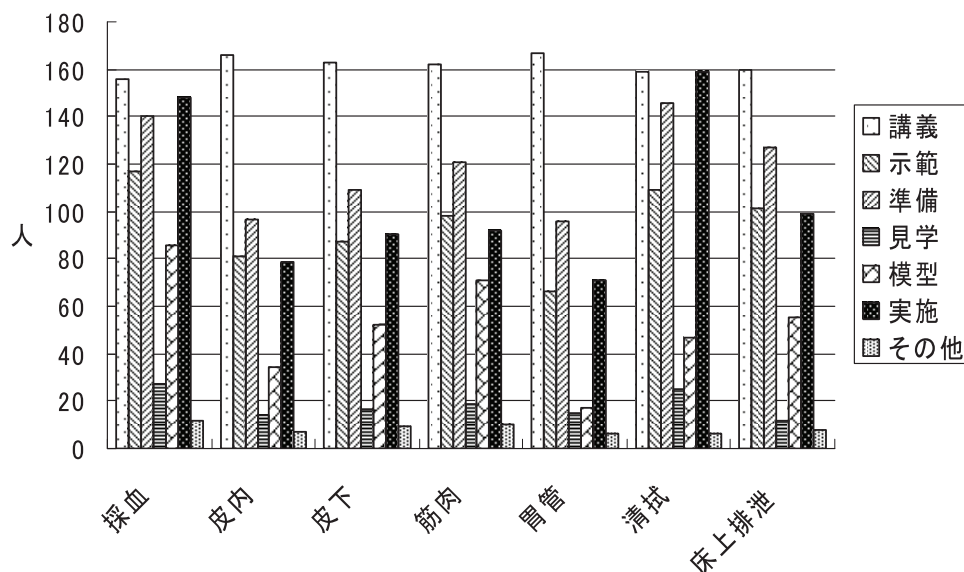


図1 体験した実習方法

IV. 結果

1. 回収率および対象者の属性

対象者 190 名のうち、185 名から回答があり、回収率は 97.4% であった。すべて有効回答であった。回答の一部に、無記入の部分があるものについては、記入されている部分を有効とし、分析対象とした。回答者の卒業教育機関は、3 年課程看護専門学校が 108 名 (58.4%) と最も多く、短大 26 名 (14.1%)、大学 6 名 (3.2%)、それに 2 年課程専門学校等を卒業しているものが 43 名 (23.2%)、無回答 2 名 (1.1%) であった。卒業年から経験年数を求めると、5～9 年が 49 名 (26.5%)、10～14 年が 59 名 (31.9%)、15～19 年が 44 名 (23.8%)、20 年以上が 26 名 (14.1%)、無回答が 7 名 (3.8%) ですべてが 5 年以上であり、10～14 年を最多とするほぼ正規分布の集団であった。

2. 学生時代に体験した技術演習の方法

体験した学内演習の方法と看護技術の項目を図 1 に示す。

「学生同士で実施」を体験した率が最も高かったのは、全身清拭 159 名 (85.9%)、次いで静脈内採血 148 名 (80.0%)、最も低かったのは経鼻胃管の挿入 71 名 (38.4%) であった。それ以外の注射 3 項目と床上排泄は学生同士で実施した体験率が半数前後であった。注射の中では、皮内注射が最も低く 79 名 (42.7%) で、筋肉内注射は 92 名 (49.7%) と最も高く、皮下注射も同程度であった。

「学生同士での実施」で、注射器を用いる演習 4 項目のうち、すべてを体験したのは 52 名 (28.1%)、静

脈内採血のみ体験し、注射はまったく体験していないもの 36 名 (19.5%) で、採血も注射もまったく体験していないものは 19 名 (10.3%) であった。

また、「示範の見学」は、いずれの実習項目においても「学生同士での実施」とほとんど同じ人数が体験していた。

「模型を用いての実施」は、いずれの項目でも「学生同士での実施」より少なかった。

3. 体験した技術演習の妥当性に対する感想

技術演習当時即ち学生時代と現在のそれぞれの時点で、各自の体験した演習方法が妥当であるかどうかについての感想を求めた質問では、学生同士で実施した群と実施しなかった群で、意見の異なったものが 4 項目あった (表 1)。その項目は、静脈内採血と注射であった。これらの項目については当時も現在も実施群で実施が「妥当である」と考えるものが有意に多く、逆に非実施群で実施しなかったことが「妥当でない」と考えるものが有意に多くなっている。即ち実施、非実施のいずれとも静脈内採血や注射の技術演習は実施することが妥当であるとする結果であった。

4. 看護師となった立場からの技術演習についての認識

学生時代に体験した技術演習について、看護師となった現在の立場からの意見を自由に記載してもらったところ、71 人から回答があった。このうち、有効回答 63 人分の回答を分析した。文脈によって 1 内容 1 件として分類した結果、合計 80 件の意見があった。

このうち、技術演習について「臨地実習での不安が

表1 学生時代に体験した実習方法の妥当性

		妥当である	妥当でない	計 (人)	
静脈内採血	当時 実施群	116	31	147	p<0.001
	非実施群	18	17	35	
	現在 実施群	98	46	144	p<0.001
	非実施群	12	24	36	
皮内注射	当時 実施群	66	12	78	p<0.001
	非実施群	38	50	88	
	現在 実施群	53	24	77	p<0.001
	非実施群	31	57	88	
皮下注射	当時 実施群	72	17	89	p<0.001
	非実施群	36	42	78	
	現在 実施群	65	24	89	p<0.001
	非実施群	32	44	76	
筋肉内注射	当時 実施群	71	19	90	p<0.01
	非実施群	47	29	76	
	現在 実施群	66	24	90	p<0.001
	非実施群	36	41	77	

軽減される」「実施したことは就職してから活用できた」などの理由で「必要」、あるいは「演習をやったよかった」とする「肯定的な意見」が12件(15.0%)あったほか、自分たちの学生時代は技術中心であったと述べ、どちらかといえばそれを「肯定的に評価」しているものが4件(5.0%)あった。また、「1回では身につかない・繰り返し練習したかった」「実施を体験したことが少なく臨床で苦労した」「注射は(実施させてもらえなかったのは仕方ないが)物品をさわったり、準備くらいはしたかった」など実施体験の少なさを問題視する意見が9件(11.3%)あった。

また、学生同士で患者役になって患者体験をすることについては、「患者の苦痛がどのようなものか知るのはよかった」「患者の気持ちをわかるためにも必要」とする意見が12件(15.0%)あった一方で、「苦痛を伴うものは模型で行うべき」「本当に必要性があったか疑問」などと批判的な意見が4件(5.0%)、「いい思い出として残っていない」「(床上排泄は)すごく嫌だった」「つらかった」などと「否定的」な感想を述べたものが6件(7.5%)あった。このなかには「浣腸を生徒同士で行った。つらかった」との記載もあった。

技術演習での指導について、「人に針を刺すとき、教員の痛い視線に耐えられなかった」「怒られていることしか思い出せない」など教員の態度や、「技術・手順中心で教え込まれたが、今となってはもっと考え

る(根拠のある)教育をしてほしかった」など教育方法に対する疑問を呈したものが8件(10.0%)あった。

その他、現在の新人看護師について、「血圧も測れない」「技術以前にコミュニケーションもとれない」「注射器を持たせただけでふるえてしまう」など技術が不足していて現場での教育が大変とする意見が9件(11.3%)あった。また、「学校間の格差をなくしレベルを統一してほしい」(4件, 5.0%)、「現場と連携し臨床で役立つ方法を教えるべき」(5件, 6.3%)、「臨床実習でもっと行ったほうがよい」(2件, 2.5%)、「医師のように卒後研修制度を作るべき」(1件, 1.3%)のように、今後に向けての提言を述べたものが計12件(15.0%)あった。また、「義務だと思った」「必要だから仕方ないと考えていた」という意見が2件(2.5%)ある一方で、「学生同士で行う演習では実際の役に立たないが、患者に初めて行うのでは実験台にしているようで嫌だ」などジレンマを感じているとするものが2件(2.5%)あった。

V. 考 察

看護技術を修得するには、方法・手順を学び、一連の流れで実施できるようシミュレートし、時には物品や模型を利用して練習を積むなど、人体に直接実施する前になすべきことは多い。ところが、今回の結果を見ると、模型を用いての実施がいずれの項目でも極め

て少ない。対象者の学生時代は、数年ないし二十数年前になるため、現在ほど性能の優れた模型がなかったという背景もあるだろう。しかし、示範や物品準備の頻度も高いとは言えず、特に採血や清拭のように学生同士で実施することの多い項目では、実施を下回っている。これは実施した項目では実施の印象が強く残り、示範や物品準備を覚えていなかったという可能性もあるが、学生同士で実施する前には、示範を行い、物品準備をさせ、模型を使って繰り返し練習をすることが、学生の権利を擁護することになると考える。

注射器を用いる4項目の中で、採血が最も実施率が高かったが、これは、臨床での実施頻度の高さを反映したものと思われる。皮内・皮下・筋肉内の3種類の注射では、学生同士で実施した割合は、筋肉内注射が最も高かった。臨床での実施頻度や手技の難しさ、失敗したときの害の大きさなどから、実施する必要性が高いと考えられているのかもしれないが、一方、筋肉への針の刺入はそれだけで組織損傷など侵襲性が高く、未熟な学生同士が行うことによる危険性の点からも、学生の身体権を侵害するものと考えられる。安全な実施のための方策を工夫することが必要な項目であろう。

演習方法の妥当性についての認識は、静脈内採血及び皮内・皮下・筋肉内の注射の4項目に関して、学生時代に実施を体験したものは実施が妥当、実施を体験しなかったものは実施しなかったことが妥当でない、と考えていることがわかった。これは、両者とも実施すべきであると考えていることを意味しており、学生時代も看護師として働く現在も、実施の必要性を感じていることがわかる。その理由としては、これらの技術は、どのような職場でも必須であること、患者の身体への侵襲となるため失敗できないこと、技術の上手下手が患者にもわかってしまうことなどで、必要性を痛感しているからだと推測される。患者側としても、採血や注射を受けるとき、その看護師が今までに人体に針を刺したことがないのであれば、受けたくないのは当然であり、学生時代に実施を体験しておく必要があると考える。その意味でも、注射を実施しなかった者が約30%、採血も含め針を刺した経験のないまま看護師となった人が約10%いたことは問題であろう。

自由記載では、技術を実施したことに対して肯定的な意見が16件(20.0%)、技術の実施が不足していたあるいは現在は不足しているとして一層の実施を望むものが18件(22.5%)あった。従って、合わせて34件(42.5%)は技術の修得の必要性を述べたものである一方、実施することに否定的な意見は全くなく、臨床で働く看護師にとって、技術修得が重要な問題となっていることがわかる。また、現場との連携を求める意

見があったように、学内演習でも設備・器具は臨床で用いられている最新のものを使用し、臨床とのギャップを埋める努力が必要であろう。このことは、新人看護師の1年以内の早期離職率が9.3%にのぼり(日本看護協会「2005年病院における看護職員需給状況調査」による)、新卒看護師による職務継続上の悩みのうち「配属部署の専門的な知識・技術が不足している」を挙げたものが76.9%と最も多くなっている⁴⁾ことから、うかがうことができる。

一方、技術演習で患者体験をしたことについては、肯定的な意見が12件(15%)、否定的な意見が10件(12.5%)あり、意見が分かれた。同じ体験でも人によって受け取り方が異なる上、今回の調査では、具体的な実施方法まではわからないため、例えば、床上排泄でも着衣のまま便尿器を当てたのか、実際に排泄までしたのかによっても、大きく異なってくると思われる。さらに、実施時の教員の関わりかたによっても、その体験のとらえ方が異なってくることも考えられる。

技術の修得という点では、学生が患者役をした場合「実施しやすいように気をつかうので、本当の患者とは違う」や「友達相手なのでいい加減になってしまう」などの意見があったとの報告⁵⁾もあり、教育効果に問題がある。

患者体験を積極的に支持し、対象理解のためには、可能な限り相手と同じ状況を事前あるいは追体験する必要があるとする意見⁶⁾も根強い。しかし、学生に紙おむつを着用させたこの研究⁶⁾でも、学生の15%は、肌触りがよい、思ったより蒸れないなど、紙おむつに肯定的な感想をもったことが報告されている。また、自分の力で日常生活動作ができず、援助を受けることで快適な状態になれる患者と異なり、自分で行った方がより快適により速い方法でできる学生が、本当に患者と同じ気持ちになることができるのか、疑問である。たとえ患者と同じ気持ちになれたとしても、体験しなければわからない、というのでは、入院したこともなければ手術を受けたこともない学生は対象理解などできないことになるのではないだろうか。学生同士で実施し合って患者体験をすることが患者の気持ちを理解する唯一の方法であるとは限らない。結局のところ、患者の気持ちを想像する力と患者の細かな表情の動きも見逃さない観察力が重要ではないかと思える。

最後に、本研究では認定看護師研修を受講している看護師を調査対象とした。看護師のなかでも指導的立場にいる集団であるため、今回の結果を看護師全般に当てはめることはできないかもしれない。また、学生時代を想起しての回答であるため、記憶の歪みなどの

影響を受け、実際に受けた実習方法を正確に反映していないことも考えられる。今後、教育機関を対象とした調査も行って、その結果とも合わせて検討していく必要がある。

VI. 結 論

学内における基礎看護技術演習のうち、特別に倫理的配慮を要する看護技術7項目の教育方法について検討するために、190名の看護師を対象に、学生時代に体験した演習方法とその妥当性に対する認識等を週及的に調査したところ、以下の結論を得た。

1. 身体的侵襲の加わる技術項目においては、「学生同士で実施」した割合は、静脈内採血が80%と最も高く、注射は実施と非実施が約半数ずつに分かれた。そして、約10%の看護師は採血も注射も体験していなかった。
2. プライバシーを侵害する可能性のある技術項目では、全身清拭は約86%が学生同士で実施し、床上排泄は実施・非実施がほぼ同率となっていた。
3. 採血及び注射については、実施した者も実施しなかった者も、実施することが妥当、と回答した。
4. 自由記載では、実施を体験することに肯定的な意見が4割を越え、否定的な意見はなかった。
5. 患者体験をしたことについては、肯定的な意見と否定的な意見に分かれた。

VII. おわりに

安全・安楽な看護を受けることは患者の権利であり、看護学生もまた確実な技術を習得する権利と義務がある。学生の人間としての基本的な権利、即ち身体権や

尊厳を尊重しながら、いかにして技術を身につけさせるかは、看護教育に携わるものの課題であろう。学生同士で実施するとなれば、自分が実施したい場合に患者役を断ることが極めて困難であることは容易に想像できる。このジレンマを解決するために、現在では有償のティーチング・アシスタントやシミュレーテッド・ペイシエントを導入しているところが出てきている。学生の権利擁護の視点だけでなく、本物の患者により近い存在でもあることから、今後導入を進めていくべきと考える。

なお、本研究は第25回日本看護科学学会学術集会において、要旨を発表した。

文 献

- 1) 厚生労働省「看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会」報告書、2002
- 2) 成田伸・石井トク、「体験学習」の文献的考察、看護教育、34(2)、91～100、1993
- 3) 渡部節子・鈴木良子・南雲マリ子他、排尿介助の演習方法と学生の認識について 青年期にある学生に与える影響、看護教育、34(2)、101～107、1993
- 4) 社団法人日本看護協会中央ナースセンター事業部、2005年新卒看護職員の入職後早期離職防止対策報告書、日本看護協会、東京、2006
- 5) 大西香代子、倫理的な能力をどうはぐくむかー基礎教育の立場からー、日本看護学教育学会誌、14(3)、48～53、2005
- 6) 松村三千子・井沢陽子、老人看護学実習展開の工夫、看護教育、41(5)、374～377、2000

要 旨

本研究の目的は、教育における倫理的配慮のあり方を研究する一環として、看護師が学生時代に体験した学内における基礎看護技術演習を遡及的に調査することである。本研究では、その演習方法や内容を明らかにするとともに技術演習に対する看護師としての意見を分析した。認定看護師研修受講の全国の看護師 190 名を対象に、自記式質問紙調査を実施した。質問は、特に倫理的配慮を要する基礎看護技術 7 項目に焦点をあてた。実習方法を尋ねたところ、身体的侵襲の加わる 5 つの技術項目のうち、静脈内採血が「学生同士で実施」を体験した割合が最も高かった (80%)。注射は約半数が「学生同士で実施」を体験していた。そして、約 10% の看護師は採血も注射も、演習において学生に対しても模型等に対しても実施した体験がなかった。プライバシーを侵害する可能性のある技術項目では、全身清拭は約 86% が学生同士で実施体験し、床上排泄は実施・非実施がほぼ同率となっていた。看護師である現在の立場での、演習に対する感想の中で、採血及び注射については、学生時代に実施した者も実施しなかった者も、「実施し体験することが妥当」とする回答が多かった。看護技術実施体験の是非については、「肯定的」が 4 割を越え、「否定的」意見はなかった。患者体験の必要性については、「肯定的」と「否定的」意見に分かれた。

以上の結果は、技術修得は看護教育にとって必須の到達目標であることを改めて浮き彫りにした。しかし、教育に携わるものは、身体侵襲性や人権侵害性という倫理的観点から、学生の権利を擁護しつつ教育効果をあげるために、最低限でも模型を利用した実施体験と反復練習が必要である。それとともに、患者の気持ちを理解するために、「演習での患者体験」ではなく、体験がなくても共感できる観察力と想像力を育むことが必要である。

キーワード: 基礎看護技術, 演習, 遡及的調査